

中国語話者のための 日本語教育研究

中国語話者のための日本語教育研究会編

第 13 号

日中言語文化出版社

目次 CONTENTS

研究論文

Research articles

中国語話者は「漢字語彙」が読めない
—音読みの語をひとまず取り上げて—

劉 志偉 1

Can Chinese speakers actually read kanji? : Focusing on Onyomi
LIU Zhiwei

中国人学習者の慣用句の意味解釈、親密度と透明度
—日本語母語話者との比較を中心に—

姚 新宇・菅谷 奈津恵 16

Chinese learners' idiom explanation, familiarity and transparency : With a
comparison with Japanese native speakers
TAO Xinyu, SUGAYA Natsue

中国語を母語とする日本語学習者の構文的複雑さと習熟度に関する一考察
—I-JAS ストーリーテリングを用いて—

倉品 さやか 30

A study on syntactic complexity and proficiency of Chinese-speaking
learners of Japanese : Using I-JAS storytelling corpus data
KURASHINA Sayaka

中国語母語話者を対象とした二字漢字語の理解
—未知・既知, L2 習熟度, 日中対応関係に着目して—

陳 夢夏 47

Understanding by Chinese learners of Japanese when encountering
Japanese two-kanji compound words : The influence of corresponding
relationship between Japanese and Chinese, known or unknown and L2
proficiency
CHEN Mengxia

大学院ゼミの質疑応答における発言者の「対応」の特徴
—中国語母語話者の参加経験に着目して—

徐 煉 62

Characteristics of speakers' responses to questions and answers in a
graduate seminar:Focusing on the participation experiences of native
Chinese Speakers
XU, Lian

日本語教材におけるナ行音・ラ行音の記述に関する一考察
—学習者用教科書と教師用参考書の調査と分析を通して—
劉 羅麟 78

How are Japanese N and R phonemes being described in Japanese
textbooks
LIU, Luolin

ピア・フィードバックに対する日本語学習者の意識
—書き手意識も視野に入れて—
岡野 靖子 94

Students' perceptions of peer feedback on Japanese L2 writings: Analyzing
the roles as feedback providers-receivers and writers
OKANO, Yasuko

第二言語としての日本語文のリピーティングにおける情報処理
李 佳洋 111

Information processing in repetition of Japanese sentences as a second
language
LI, Jiayang

逸脱的な場面における日中母語話者の発話ストラテジーについて
—「上下関係」と「逸脱度の高低」の要因を中心に—
儲 叶明 126

Utterance strategies of native Japanese and Chinese speakers in deviant
situations : An inquiry into the role of hierarchical relationships and degree
of deviance
CHU, Yeming

異文化間能力の向上を目指した CLIL アプローチの可能性
—中国の大学における「日本概況」授業の事例を中心に—
曾 琴 141

The possibility of CLIL approach aimed at improving intercultural
competence : Focusing on the case of "Japanese circumstances" class at a
Chinese university
ZENG, Qin

コラム

台湾の大学における日本語教育
古賀 悠太郎 156

Japanese language education in Taiwan
KOGA, Yutaro

研究会の組織 162
Management of the study group

研究発表応募規定 165
Notes for contributors

会誌投稿規定 167
Notes for contributors

会誌執筆要領 169
Notes for contributors

大会委員会からの便り 170
Notes from the study group meeting committee

査読協力者一覧 171
List of reviewers

編集後記 建石 始 172
Postscript
TATEISHI, Hajime

日本語教材におけるナ行音・ラ行音の記述に関する一考察 —学習者用教科書と教師用参考書の調査と分析を通して—

劉 羅麟 (早稲田大学大学院生)

要 旨

本稿では音声の観点から、日本で出版された教材におけるナ行音・ラ行音に関する記述を分析した。その結果、《理論》と《実践》に大別される様々な記述が確認された。《理論》では〈ナ行音・ラ行音の混同の現象〉〈音声学上の名称・記号〉〈ラ行音の異音〉〈日本語と他言語の子音の異同〉に関する記述が見られ、《実践》では〈生成の練習〉〈知覚の練習〉〈練習材料〉に関する記述が見られた。今後の教材の改善や開発に向け、これらの記述における検討すべき点を4点述べた。

キーワード：音声教育，教材分析，発音練習，聴取練習，/n/・/r/の混同

1. はじめに

中国語を母語とする日本語学習者には、母方言の影響で日本語のナ行音・ラ行音を混同する者がいる。例えば、雲南・四川・重慶・湖北出身の西南官話話者、広東・香港出身の粵語話者、福建・台湾出身の閩語話者などである(李・村島 2002, 陳 2013, 大久保 2013, 劉 2020)。

ナ行音・ラ行音の混同に悩まされる学習者には、音声教育による支援が必要である。一つの手段としては、教材(特に音声に特化した教材)が挙げられる。ここで言う教材とは、①学習者が日本語の音声について学習し練習するための教科書、②教師が音声の指導方法を知る(もしくは新しく考案する)ための参考書、の両方を指す。本稿では、教材の改善や開発に向け、市販の教材におけるナ行音・ラ行音に関する記述を音声の観点から分析し検討する。

2. 先行研究

音声の観点から市販の日本語教材を分析した先行研究は、文法や語彙と比

べて少ない¹。管見の限り、音声に着目した教材研究は次の2種類に大別される。①教材における音声項目(単音, リズム, アクセント, イントネーションなど)に関する記述を分析したもの(土岐 1986, 李 2013 など)。②教材における語彙, 例文などを音声の観点から分析したもの(橋本 2000, 鹿島 2010 など)。本稿はナ行音・ラ行音に関する記述に着目しており、上記の①にあたる。

ナ行音・ラ行音に着目した教材研究は、管見の限り大久保(2013)のみである。大久保(2013)は知覚に焦点を当て、既存の教材の問題点として「練習問題が少ししかないという点と聴取練習がない教材が多いという点」(p.177)を挙げている。ナ行音・ラ行音の混同は知覚だけでなく生成にも見られる。そのため、本稿では生成と知覚の両側面から既存の教材を分析する。また、大久保(2013)は四川・広東・台湾の教材を調査対象としており、日本の教材に関しては先行研究が見当たらない。日本国内にも中国語話者の日本語学習者が数多くおり、これらの学習者(およびその担当教師)は、海外の教材よりも日本の教材を使用することが多いと思われる。そのため、本稿では日本で出版された教材を対象に調査を行う。

3. 研究目的と分析対象の選定

本稿の目的は、音声教育のための教材の改善や開発に向け、市販の日本語教材におけるナ行音・ラ行音に関する記述を、音声の観点から分析し検討することである。分析対象となる教材は、凡人社が発行する日本語教材リストを参考に、「発音・聴解」「音声・音韻」「日本語教授法」の分類から選定する。「総合教科書」の分類に入る教材はその性質ゆえ、ナ行音・ラ行音に関する記述が五十音図を除き殆ど見られなかったため、選定から除外した。選定の結果、分析対象となった教材は、ナ行音・ラ行音に関する詳細な記述が見られる13冊である(次ページ, 表1)。

1 これは、学会誌『日本語教育』第1～161号に掲載された教材研究の論文を調査した河住(2016)の結果からも窺える。「教育内容を視点とした教材研究論文:i言語要素」の分類のうち、文法は4本、語彙は4本、音声は1本のみである。

4. ナ行音・ラ行音に関する記述の分析

本節ではまず、表1の教材におけるナ行音・ラ行音に関する記述の全体像を把握するために、4.1で記述を内容によって分類する。そのうえで、4.2と4.3で分類ごとに記述の内容を分析する。

表1 分析対象の日本語教材一覧

種類	略称	教材名
学習者用 教科書 (ST)	ST1	『日本語はつおん』
	ST2	『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』
	ST3	『にほんご発音かんたん』
	ST4	『5分でできる にほんご 音の聞きわけトレーニング』
	ST5	『ひとりでも学べる日本語の発音』
教師用 参考書 (TT)	TT1	『教師用日本語教育ハンドブック⑥ 発音』
	TT2	『やさしい日本語指導5 音韻/音声』
	TT3	『日本語教育のための音声表現』
	TT4	『日本語教育をめざす人のための基礎から学ぶ音声学』
	TT5	『日本語教授法シリーズ2 音声を教える』
	TT6	『音声教育の実践』
	TT7	『新・はじめての日本語教育1』
	TT8	『日本語教育 よくわかる音声』

4.1 ナ行音・ラ行音に関する記述の全体像

ナ行音・ラ行音に関する記述を内容によってラベリングし分類した。その結果、《理論》と《実践》の2大分類に分けられる7小分類が確認された(表2)。《理論》では、①〈ナ行音・ラ行音の混同の現象〉、②歯茎鼻音 [n] や歯茎はじき音 [r] などの〈音声学上の名称・記号〉、③標準とされるはじき音以外の接近音やふるえ音などの〈ラ行音の異音〉、④中英仏独西露など〈日本語と他言語の子音の異同〉に関する記述が見られた。《実践》では、①発音のための〈生成の練習〉、②聴取のための〈知覚の練習〉、③ナ行音・ラ行音を含む語や文などの〈練習材料〉に関する記述が見られた。

本稿で分析した13冊の教材は、いずれも《理論》から《実践》に進む順番となっている。ただし、そのうちの4冊は、《理論》に関する記述がメイ

ンである(表2のTT2, 4, 7, 8, いずれも教師用参考書である)。この4冊にはナ行音・ラ行音の調音位置や調音方法に関する説明はあるが、それ以上の具体的な練習方法が記述されていない。また、練習用の材料(ナ行音・ラ行音を含む語や文など)も提示されておらず、各々の教師の裁量に任せられている。

表2 ナ行音・ラ行音に関する記述の分類

大分類	小分類	学習者用教科書 ST					教師用参考書 TT								合計
		1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	6	7	8	
理論	ナ行音・ラ行音の混同の現象		○				○			○	○	○		○	6
	音声学上の名称・記号	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12
	ラ行音の異音					○	○	○	○	○	○	○		○	8
	日本語と他言語の子音の異同		○				○	○		○	○	○		○	7
実践	生成の練習	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	12
	知覚の練習			○	○	○									3
	練習材料	○	○	○	○	○		○		○	○				9

4.2 《理論》に分類される記述

4.2.1 〈ナ行音・ラ行音の混同の現象〉

〈ナ行音・ラ行音の混同の現象〉では、混同が見られる方言話者(または地域)および混同が起こる原因が、実例とともに例(1)のように記述されている。このような記述は主に教師用参考書に見られるが、学習者用教科書のST2にも見られる。

- (1) 広東語、閩南語では、[l] と [n] が1つの音素の異音関係にあることから、「ひなた」→「ひらた」、「らんかん」→「なんかん」のように、ラ行とナ行の混同が多く見られます。【TT6】²

上記のような混同の現象に関する説明は、学習者や教師に問題の所在と原因を提示し、学習目的の明確化を促すのに役立つと考えられる。

2 全て原文ママの引用であり、引用元は【 】で示す(下線は筆者、以下同様)。

4.2.2 〈音声学上の名称・記号〉

〈音声学上の名称・記号〉では、ナ行音・ラ行音の子音を表す音声学の用語と国際音声記号が記述されている。このような記述はST3を除き殆どの教材に見られるが、記述の緻密さは学習者用教科書と教師用参考書で異なる。

学習者用教科書では、ナ行音をまとめて「(歯茎) 鼻音 [n]」、ラ行音をまとめて「(歯茎) はじき音 [r]」と説明している。教師用参考書では、ナ行音を「ナヌネノ」と「ニニヤニユニヨ」に分け、前者を「歯茎鼻音 [n]」、後者を「硬口蓋鼻音 [ɲ]」または「歯茎硬口蓋鼻音 [ɲ]³」と説明している。ラ行音も同様に「ラルレロ」と「リリャリュリョ」に分け、前者を「歯茎はじき音 [r]」、後者を「口蓋化した歯茎はじき音 [r^j]」と説明している。

上記のように、学習者用教科書と教師用参考書における〈音声学上の名称・記号〉の記述の緻密さが異なる。この点については5.1で詳述する。

4.2.3 〈ラ行音の異音〉

〈ラ行音の異音〉では、ラ行音のバリエーションとして、はじき音 [r] 以外の側面接近音 [l] やふるえ音 [r̥] などの異音が記述されている。学習者用教科書ではST5にのみ、例(2)のような簡単な言及が見られる。教師用参考書ではTT7を除き殆どの教材に、例(3)のような詳細な記述が見られる。

(2) ら行は、人によっては [l] で発音する場合があるなど、バリエーションがある発音です。【ST5】

(3) 共通語のラ行の一般的な発音は「弾き音」ですが、ときに「巻き舌」あるいは「べらんめえ」といわれる [r] がでることがあります。(中略)
「べらんめえ」は「べらぼうめ」と人をののしるときの、江戸っ子の荒っぽい口調から名付けられたものです。(後略)【TT2】

上記のような異音は、意味に影響を及ぼさないが、聞き手に異なるイメージを与える可能性がある。例えば、TT5にも言及があるように、ふるえ音 [r̥] は「怒っている」「強い口調」といったイメージを聞き手に与えてしまう可

能性がある。このような発音は、アニメやドラマなどでもしばしば使用されている。学習者がそれを不用意に真似した場合、相手に誤解される恐れがある。それを防ぐために、学習者教科書のほうでも、〈ラ行音の異音〉がもたらすイメージへの影響について言及することが望ましいであろう。

4.2.4 〈日本語と他言語の子音の異同〉

〈日本語と他言語の子音の異同〉では、日本語のナ行音・ラ行音と他言語の近似する子音との比較が記述されている。学習者用教科書ではST2にのみ、例(4)のような簡単な言及が見られる。教師用参考書ではTT3とTT7を除き殆どの教材に、例(5)のような詳細な記述が見られる。

(4) [n] の発音は、(中略) 北京語の「哪」の子音に近い音です。【ST5】

(5) 世界の言語の「r」の音の作り方は、いろいろな種類があります。(中略)
英語の r の発音は(中略)音としては日本語のラ行の音とはかなり違って聞こえます。そのため、日本語のラ行をこの音で発音すると、意味の区別にはあまり影響しませんが、いかにも強い「英語なまり」があるような発音に聞こえます。また、人によってはときどきワ行のように聞かれてしまうこともあります。【TT5】

上記の例に挙げた中国語や英語のほか、フランス語・ドイツ語・スペイン語・ロシア語などの諸言語の子音との比較も見られる。学習者の母語（もしくは学習経験のある言語）にある近似する子音と比較し、その差異について説明することにより、日本語の子音の習得を促す効果が期待される。

4.3 《実践》に分類される記述

4.3.1 〈生成の練習〉

〈生成の練習〉では、ナ行音・ラ行音の発音の仕方や練習方法が記述されている。記述の詳細さに違いがあるものの、知覚に特化したST4を除き、殆どの教材に見られる。また、ST2, 5やTT1, 5, 6のように、一つの教材で複数のアプローチが併用される場合もある(表3)。

【音声学の情報で説明する】というアプローチでは、例(6)のように、調音位置・方法に関する調音音声学の情報を発音の練習に取り入れている。

3 本稿で分析した教材では歯茎硬口蓋鼻音を硬口蓋鼻音と同様に [ɲ] と表記しているが、[ɲ] でなく [ɲ̟] と表記すると提唱する音声学者もいる。

(6) はじき音の [r] を作る練習をしましょう。1. 口を軽く開け、声を出さないで舌先が歯茎の後ろの盛り上がった部分をはじく。(後略)【TT5】

表3 〈生成の練習〉に用いられるアプローチ

アプローチ	学習者用教科書 ST					教師用参考書 TT							
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	6	7	8
音声学の情報で説明する	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○
他言語の知識で説明する		○				○				○			
手を使う		○			○	○				○	○		
速度を速める		○								○	○		
子音を伸ばす										○	○		
別の子音で引き出す		○	○		○								

【他言語の知識で説明する】というアプローチでは、例(7)のように、日本語以外の言語の子音に関する知識を発音の練習に取り入れている。

(7) アメリカ英語の話者は、実は [r] を持っているのである。(中略) 強勢を受けた音節と無強勢の音節の母音との間に生じる [t] や [d] の代わりに、ときとして [r] が発音されることがある。(中略) このことを意識させれば、アメリカ英語の話者には近道となるであろう。【TT1】

【手を使う】というアプローチでは、例(8)や(9)のように、本来調音に直接関わらない手を補助として練習に活用している。

(8) ナーラを、鼻をつまんで言わせ、ナのみが鼻がつまったような変な声になることを確認します。(後略)【TT6】

(9) (ラ行音を) イラストのように、舌先が1回弾く様子を手で作りながら発音しましょう。(イラスト略)【ST2】

【速度を速める】というアプローチでは、例(10)のように、ラ行音の子音 /r/ が(はじき音の場合)一瞬で終わるという性質を活かし、速く発音することにより「はじく」という調音方法を練習する。

(10) 舌先が歯茎の後ろの盛り上がった部分を(中略)できるだけ速く、何回もはじくように練習する。(中略) 声を出しながら、「ラララララララ…」とできるだけ速く言う。【TT5】

【子音を伸ばす】というアプローチでは、例(11)のように、ナ行音の子音 /n/ が持続的に発音できるという性質を活かし、伸ばして発音することにより「息が鼻に抜ける」という調音方法を練習する。

(11) はじめに、「ハンーナ」[han:a] と [n] をのばして発音する。「シー」のときに、舌先が口の空気の通り道をふさいでいる感覚を意識する。
[n] の部分をだんだん短くしていき、「はな」にしていく。【TT5】

【別の子音で引き出す】というアプローチでは、例(12)のように、ダ行音の調音位置がナ行音・ラ行音とほぼ同じであることを利用し、/d/ から /n/ または /r/ を引き出す練習をする。

(12) 学習者にはまず [d] を発音させ、上記の違い 1, 2, 3 を説明しながら [d] から [r] へと導く。一度でうまく行かなければ何度も [d] に戻って、1, 2, 3 のポイントを確認して [r] に近づける。だいたいできて、3の「軽くはじく」という点ができず強く破裂させる場合もあるから、その点は特に注意したい。【TT1】

上記のように、様々なアプローチから発音の練習方法が提供されている。ただし、中には、実際の練習や指導にあたり注意すべき点もある。この点については5.2で詳述する。

4.3.2 〈知覚の練習〉

〈知覚の練習〉では、ナ行音・ラ行音の聴取の練習問題が記述されている。このような記述は教師用参考書に見られず、一部の学習者用教科書にのみ見られる。また、〈生成の練習〉(4.3.1参照)と比べ、〈知覚の練習〉に関する記述は詳細さに欠ける。

知覚に特化した教材であるST4では、三つのステップからなる練習が提示されている。①ミニマル・ペアとなる二語を聞き分ける。②例を聞いた後、三つの語を聞き、例と同じものを選ぶ。③文の抜けている部分を聞き取り、空欄に書く。ただし、何を手がかりにナ行音・ラ行音を聞き分ければ良いのかに関する記述が見当たらない。一方、生成に特化した教材にも、〈知覚の練習〉に関する記述が一部見られる。ST3では、ナ行音・ラ行音を含む語(例:「おんならしいひと」「ていねいはいいかた」)を聞き、ラ行音が入っている

かどうかを判断する問題が見られる。ST5では、二つの文(「おどりましょう」と「おどにましょう」)を聞き、どちらが正しいかを判断し、両者がどう違うかについて考える問題が見られる。これらの記述は、具体的な練習方法というよりも、練習問題に近いとも言えよう。

上記のように、生成(発音)と比べ、知覚(聴取)の具体的な練習方法が不足している現状がある。この点については5.3で詳述する。

4.3.3 〈練習材料〉

〈練習材料〉では、ナ行音・ラ行音を含む語や文などが記述されている。このような記述は13冊の教材のうち、学習者用教科書5冊と教師用参考書4冊に見られる。これらの練習材料は、音韻構造(ナ行音・ラ行音の子音/n/・/r/の現れ方)によって4種類に分類できる(表4)。

表4 〈練習材料〉の分類

音韻構造による分類	学習者用教科書 ST					教師用参考書 TT							
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	6	7	8
単体型	○	○	○	○		○				○	○		
連続型	○	○	○		○	○		○		○	○		
対照型		○		○									
交互型		○	○		○			○		○	○		

【単体型】の練習材料では、「なつ いなか らいう からい」のように、一つの語に/n/または/r/が片方のみ、そして1回のみ現れる。混同に繋がる要素が少ないため、ナ行音・ラ行音のそれぞれの基本を把握するのに適していると考えられる。【連続型】の練習材料では、「られりるれろらろ」のように、一つの語(無意味語を含む)に/n/または/r/の片方が複数回現れる。前述した【単体型】よりは難易度が高くなっていると考えられる。【対照型】の練習材料では、「はら・はな くり・くに エル・エヌ」のように、ミニマル・ペアとなる二つの語に/n/と/r/の両方が対照的に現れる。/n/と/r/を除けば音韻構造が殆ど同じであり、ナ行音・ラ行音の違いを把握するのに適していると考えられる。【交互型】の練習材料では、「老若男女 やらなければ

ならない」のように、/n/と/r/の両方が交互に現れる。ナ行音・ラ行音の違いに留意しながら両者を交互に発音(または聴取)しなければならないため、練習材料としての難易度が高いと考えられる。

上記のように、既存の教材では【単体型】【連続型】【対照型】【交互型】の4種類の練習材料が提供されている。ところが、習得研究で困難と判明された【撥音付加型】の練習材料は殆ど見当たらない。この点については5.4で詳述する。

5. ナ行音・ラ行音に関する記述の検討

前節では既存の教材に見られる記述を内容によって分類し、分類ごとに分析を行った。そのうち、〈ナ行音・ラ行音の混同の現象〉〈ラ行音の異音〉〈日本語と他言語の子音の異同〉に関しては特に問題点が見られなかった。本節では、問題点が見られた〈音声学上の名称・記号〉〈生成の練習〉〈知覚の練習〉〈練習材料〉に着目し検討する。これらの検討は、今後教材を改善または開発する際の一助となろう。

5.1 〈音声学上の名称・記号〉に関する記述の検討

〈音声学上の名称・記号〉は殆どの教材で使用されている。学習者用教科書ではその記述が簡略だが、教師用参考書では記述が精密である(4.2.2)。両者にはそれぞれの配慮や意図があると考えられる。

学習者用教科書における簡略な記述は、音声学の観点から見れば正確さに欠ける。これは、学習者や音声学を専門としない教師の理解の負担を軽減するために、あえてこのように記述しているとも考えられる。一方、教師用参考書における精密な記述は一見煩雑だが、子音の細かい違いやそれによって起こりうる発音や聴取上の問題を教師に説明するという意図がある。このような意図は、教師用参考書TT2とTT5の記述から読み取れる。その記述によれば、もし学習者が「ニ ニャ ニュ ニョ」が[n]であると知らずに、それを「ナ ヌ ネ ノ」と同様に[n]で発音すると、自然でない(または日本語らしくない)発音に聞こえるという。あるいは、「ニ ニャ ニュ ニョ」が[n]であると知らずに、ナ行音が全て[n]だと誤解すると、[n] (例：カニ)を

聞いた際に [ŋ] (例：鼻濁音のカギ) と誤聴する可能性があるという。

学習者用教科書と教師用参考書とでは勿論、対象とする読者が異なるため、記述の詳細さに違いもある。ただし、上記のように、「ナヌネノ」と「ニニャ ニュ ニョ」の子音の相違に関しては、発音や聴取上の問題に繋がる（ラ行音も同様）。そのため、学習者用教科書においても、子音の相違について提示したほうが望ましい。一つの方法としては、異なる子音に対して〈音声学上の名称・記号〉を使い分けることが考えられる。なぜなら、英語教育では〈音声学上の名称・記号〉の使用が、目に見えぬ音声を可視化し、目標言語の音声に対する学習者の意識化を促し、音声の知覚と音韻カテゴリーの確立や統合を促進すると報告されているからである (Mompean 2015, Fouz-González & Mompean 2020)。日本語教材においても今後、〈音声学上の名称・記号〉の使用について、より積極的に検討すべきであろう。

5.2 〈生成の練習〉に関する記述の検討

教材で提供されている〈生成の練習〉には、様々なアプローチが用いられている (4.3.1)。これらのアプローチにはそれぞれ、効果が期待できる点や、実用にあたり注意すべき点があると考えられる。

例えば、【他言語の知識で説明する】というアプローチでは、中国語(北京語)の「哪」の子音 /n/ を用い、日本語のナ行音の子音を説明するという方法がある。このような説明は、音声学の理論のみでの説明と比べ、より理解しやすいと期待できる。ただし、ナ行音・ラ行音を混同する学習者には、その母方言の影響で北京語の /n/・/l/ を混同する者もいる。このような学習者には、北京語の知識で説明する方法は必ずしも有効とは限らない。

また、【手を使う】というアプローチでは、手で鼻をつまみながら発音し、息が鼻を抜ける感覚が手に伝わるかどうかで、ナ行音・ラ行音の違いを感じるという方法がある。ナ行音・ラ行音はいずれも歯茎音であり、息が鼻から抜けるかどうかで最大の違いである。そのため、手で鼻をつまむ方法は有効だと期待できる。ただし、中国南部出身の学習者の方言では /l/ が鼻音化し [l̥] になる場合がある (袁 1989, 朱 1992, 王 1994, 麦 2007 など)。その要領で発音すると、ラ行音に聞こえる発音でも鼻音化している場合がある。

この場合、手で鼻をつまむ方法はうまく機能しない可能性がある。

上記のように、これらのアプローチには効果が期待できる点もあれば、実用にあたり注意すべき点もある。実際の練習や指導において、一つのアプローチで満足できる効果が得られない場合は、ほかのアプローチへの切り替えや、複数のアプローチの併用が考えられる。発音指導の経験が豊富な教師は各々の状況に合わせて自ら判断もできるが、そうでない教師や学習者にとっては容易ではない。そのため、学習者や教師を支援する役割を持つ教材においては、各アプローチの効果と注意点に関する情報を「練習上のポイント」などの形で、明確に提示したほうが望ましいであろう。

5.3 〈知覚の練習〉に関する記述の検討

既存の教材では、〈生成の練習〉と比べ〈知覚の練習〉に関する記述が詳細さに欠ける (4.3.2)。これは、四川・広東・台湾の市販の教材を調査した大久保 (2013) の指摘とも一致する。

〈知覚の練習〉に関する記述の不足は、音の聞き取り (聴取) よりも内容の理解 (聴解) を目的とした教材が多いことと関係していると考えられる。凡人社が発行する『日本語教材リスト』を例に見ると、「日本語学習者用／発音・聴解」のカテゴリーに分類される教材 41 冊のうち、聞くことに着目した教材は 30 冊ほどある。その多くは、日本語の録音を聞き意味を理解するという目的の、いわゆる「聴解」の教材である。日本語の音を聞き取る (または聞き分ける) という目的の、いわゆる「聴取」の教材ではない。

ナ行音・ラ行音の混同は生成だけでなく、知覚にも見られる (陳 2013, 大久保 2013, 劉 2020)。ナ行音・ラ行音を聞き分けられない学習者や、そのような学習者を担当する日本語教師は、〈知覚の練習〉に関する情報を必要としていると思われる。今後は、具体的な知覚 (聴取) の練習方法を教材として提供することが喫緊の課題である。

5.4 〈練習材料〉に関する記述の検討

教材で提供されている〈練習材料〉は、【単体型】【連続型】【対照型】【交互型】の 4 種類に分類できる (4.3.3)。習得研究の成果から、撥音を伴うナ

行音・ラ行音が困難であることが明らかになっている。そのため、その練習材料の提供も必要だと考えられる。

ナ行音・ラ行音の前後に撥音「ん」が現れる場合、混同がより起こりやすくなるのが、多くの先行研究に指摘されている（李・村島 2002, 大久保 2013, 陳 2013, 劉 2020）。これは、撥音の鼻音の性質による影響だと指摘されている。ナ行音・ラ行音の混同を克服するうえで、撥音による影響は避けては通れない難関だと言えよう。それにもかかわらず、既存の教材には、「ねんしゅう・れんしゅう こんなん・こんらん」のような撥音を伴う練習材料（ここでは【撥音付加型】と呼ぶ）が殆ど見当たらない。

上記のように、撥音を伴うナ行音・ラ行音の混同が起こりやすいと習得研究で解明されているが、既存の教材には【撥音付加型】の練習材料が提供されていない。教材にない練習材料を学習者や教師が自ら探すことも可能だが、教材には学習者や教師を支援する役割がある。そのため今後は、教材において【撥音付加型】の練習材料を提供する必要があると思われる。

6. まとめ

本稿では、日本語教材におけるナ行音・ラ行音に関する記述を調査し分析した。これらの記述を内容によって、《理論》と《実践》に大別される7つに分類した(4.1)。《理論》では〈ナ行音・ラ行音の混同の現象〉〈音声学上の名称・記号〉〈ラ行音の異音〉〈日本語と他言語の子音の異同〉に関する記述が見られ(4.2)、《実践》では〈生成の練習〉〈知覚の練習〉〈練習材料〉に関する記述が見られた(4.3)。

分析を踏まえ、問題点が見られた分類についてはさらに検討を行った。具体的には、①発音や聴取において問題になりうる箇所に関しては、〈音声学上の名称・記号〉を正確に使い分け、子音の違いを明示したほうが望ましい。その際には、英語教育の研究成果が参考になる(5.1)。②〈生成の練習〉に用いられている各アプローチには、それぞれの効果や注意点がある。これらの情報を「練習上のポイント」などの形で、教材で提示したほうが望ましい(5.2)。③〈知覚の練習〉に関する記述は生成（発音）と比べ不足している。具体的な知覚（聴取）の練習方法を教材として提供することが喫緊の課題で

ある(5.3)。④【単体型】【連続型】【対照型】【交互型】の4種類の〈練習材料〉が提供されているが、習得研究で特に困難だと解明された【撥音付加型】は見当たらず、今後教材で提供する必要がある(5.4)。

今後は、上記の分析と検討を踏まえ、既存の教材の改善や、新規の教材の開発を図っていきたい。

参考文献

- 大久保雅子(2013)『日本語学習者における音韻習得に関する研究—中国語方言話者のナ行音・ラ行音聴取を事例として—』早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文
- 鹿島央(2010)「日本語リズムの派生について—初級教材の分析と音声教育への応用をめざして—」『名古屋大学留学生センター紀要』8, 5-14, 名古屋大学留学生センター
- 河住有希子(2016)「日本語教材研究の視座—日本語教材研究フレームワーク作成への試案—」吉岡英幸・本田弘之編『日本語教材研究の視点—新しい教材研究論の確立をめざして—』くろしお出版, 48-64
- 陳景升(2013)「日本語学習におけるナ行音とラ行音の聞き取り混同—中国閩東語母語話者を対象として—」『日本語研究』33, 31-43
- 土岐哲(1986)「音声教育の面から見た教科書」『日本語教育』59, 24-37
- 橋本慎吾(2000)「音声の問題と規則の問題—初級教科書の語彙頻度分析に基づく特殊モーラの導入時期に関する1考察—」『岐阜大学留学生センター紀要』No.2000, 17-24, 岐阜大学日本語・日本文化教育センター
- 李活雄・村島健一郎(2002)「借用語に見られる音声混同—香港広東語話者の日本語 n-/r- の混同から—」『音声研究』6(2), 98-104
- 李範錫(2013)「大学の初級日本語教材における音声項目の分析」『日本語学研究』38, 167-189
- 劉羅麟(2020)「中国語成都・重慶方言話者によるナ行音・ラ行音の知覚混同—子音・母音・音環境に着目して—」『早稲田日本語研究』29, 1-12
- 曹志耘主編(2008)《汉语方言地图集 语音卷》商务印书馆(北京)
- 麦耘(2007)〈现代广州话两对响音声母的演变〉《第十届国际粤方言研讨会论

- 文集》11-16, 中国社会科学出版社 (北京)
- 王群生 (1994) 《湖北荆沙方言》 武汉大学出版社 (武汉)
- 袁家骅 (1989) 《汉语方言概要》 (第2版) 文字改革出版社 (北京)
- 朱建颂 (1992) 《武汉方言研究》 武汉出版社 (武汉)
- Fouz-González, J., & Mompean, J. (2020). Exploring the Potential of Phonetic Symbols and Keywords as Labels for Perceptual Training. *Studies in Second Language Acquisition*, 43(2), 297-328.
- Mompean, J. (2015). Phonetic Notation in Foreign Language Teaching and Learning: Potential Advantages and Learners' Views. *Research in Language*, 13(3), 292-314.

参考資料

- 池田悠子 (2000) 『やさしい日本語指導 5 音韻／音声』 国際日本語研修協会
- 鹿島央 (2002) 『日本語教育をめざす人のための基礎から学ぶ音声学』 スリーエーネットワーク
- 加瀬次男 (2001) 『日本語教育のための音声表現』 学文社
- 河野俊之 (2014) 『日本語教師のための TIPS77 第3巻 音声教育の実践』 くろしお出版
- 木下直子・中川千恵子 (2019) 『ひとりでも学べる日本語の発音』 ひつじ書房
- 国際交流基金 (1978) 『日本語はつおん』 凡人社
- 国際交流基金 (1989) 『教師用日本語教育ハンドブック⑥ 発音 (改訂版)』 凡人社
- 国際交流基金 (2009) 『国際交流基金 日本語教授法シリーズ 2 音声を教える』 ひつじ書房
- 高見澤孟・ハント蔭山裕子・池田悠子・伊藤博文・宇佐美まゆみ・西川寿美・加藤好崇 (2016) 『新・はじめての日本語教育 1 (増補改訂版)』 アスク出版
- 戸田貴子 (2004) 『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』 スリーエーネットワーク
- 松崎寛・河野俊之 (2018) 『日本語教育 よくわかる音声』 アルク

- 宮本典以子・大崎伸城 (2011) 『5分のできる にほんご 音の聞きわけトレーニング』 スリーエーネットワーク
- 吉岐久子 (2010) 『にほんご発音かんたん』 研究社
- 凡人社日本語教材リスト No.48 < <https://www.bonjinsha.com/wp/nihongokyouzailist> > (最終閲覧: 2022年2月14日)